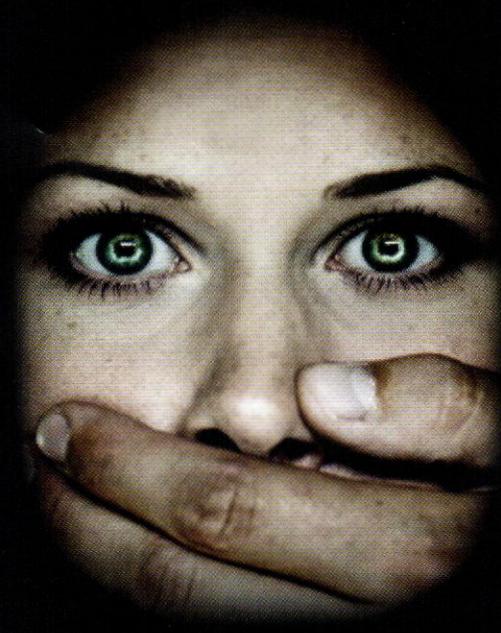


それでもあなたは提供しますか？



カイリーは45個を提供し
今も脳梗塞の
後遺症に苦しんでいる

アレクサンドラは
28個の卵子を提供し
卵巣を失った

シンディは60個の
卵子を摘出されたあと出血し
生死の境をさまよった…

卵子提供 美談の裏側

アメリカの不妊治療は数千億円規模の巨大産業に成長している。そこでもっとも盛んに取引されているものは何か？ — 人間の卵子だ。ドナーを募る求人広告はもちろん、映画やテレビドラマの中で卵子提供は、女性たちの助け合い、自己犠牲、科学技術の華麗なる成果など美辞麗句で語られる。しかしそこに卵子提供の現実には表れていない。本作では卵子を提供した女性たちへのインタビューを通じて、実際の「卵子提供者」の扱われ方、提供者たちが負ったさまざまなリスクなど、これまで知られていない実態が明らかにされていく。



原題「Eggsplotation」

制作 米国 The Center for Bioethics and Culture Network 「生命倫理文化ネットワークセンター」
日本語版制作・上映 代理出産を問い直す会 eggsplotationjapan@gmail.com

上映会 2014年5月31日(土) 13:30~
明治学院大学白金キャンパス 320/教室
地下鉄 白金台駅歩8分 または都バス

作品介绍

今やアメリカの不妊治療は数千億円規模の巨大産業に成長している。そこでもっとも盛んに取引されているものは何か？——人間の卵子だ。大学構内の掲示板やソーシャル・メディア、オンラインの求人広告では、若い女性たちが数十万円から数百万円、ときには一千万円にも達する額を提示されている。そして誰かの夢を叶えるために「人助けをしましょう」と甘い言葉で誘われるのだ。

巷ではそれらの求人広告はもちろん、映画やテレビドラマまでもが卵子提供に好意的だ。卵子提供は、女性たちの助け合い、自己犠牲、科学技術の華麗なる成果として描かれる。しかしそこに卵子提供の実態は表れていない。彼女たちが提供を決めた経緯はもちろん、どのように薬を使用し、手術を受けているのか、そして提供後、彼女たちがどうなっているのかは美辞麗句の裏に隠されたままだ。

本映画の原題は『Eggsplotation』。「eggs」(卵子)と「exploitation」(収奪)をつなげた造語である。作品内では当事者へのインタビューを通じて、実際の卵子提供者の扱われ方、提供者が経験する短期的リスクや長期的リスクといった、今まで知られていない実態が明らかにされる。そこからは、若い女性たちを資源とみなし収奪し続ける姿、すなわち卵子提供の常套句である「人助け」とは対極の収奪システムが浮かび上がってくる。

本映画を制作した「生命倫理文化ネットワークセンター」(The Center for Bioethics and Culture Network)は米国のNPO団体であり、生命倫理に関する社会問題を対象に、ウェブサイトを通じた情報発信はもとより、ドキュメンタリー映画製作や、講演、メディアにおけるインタビューへの出演などを行っている。近年では生殖技術に関する法律制定に係る公聴会に出席し、米国内で生殖技術政策への政治的発言力を高めつつある。

生命倫理文化ネットワークセンターは、本映画『Eggsplotation』の他にもクローン人間作製を中心に幹細胞研究に関する倫理的問題を扱う『Lines That Divide』(2009年)を手がけたり、匿名で提供された精子により生まれた人々の問題を描く『Anonymous Father's Day』(2012)を制作してきた。

制作者について

日本語版制作プロジェクト

日本語版制作は、若手の研究者を中心とするグループ「代理出産を問い直す会」が、2013年度竹村和子フェミニズム基金の助成を受け、生命倫理文化ネットワークセンターによる著作権の許可を得た上で行われた。なお、元の映画『Eggsplotation』は2010年にリリースされたが、2013年10月に更に新たな事例を追加した新バージョンが再リリースされた。今回、日本語版制作に用いたのは、この新バージョンである。

代理出産を問い直す会

「代理出産を問い直す会」(代表:柳原良江)は2008年に東京大学大学院人文社会系研究科グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」(現死生学・応用倫理センター)の若手研究員3人により設立され、その当時メディアを通じて大きな社会問題となっていた代理出産を中心に、第三者の関わる生殖技術のもたらす倫理的問題点に関する研究を行ってきた。一般的にこの問題は医学・科学技術的側面から語られがちだが、本会では特に、それらの議論では見過ごされがちな、生命や人の意味・価値、あるいは搾取や収奪など人文社会的な側面に焦点を当てている。

学術的な研究活動に加え、それらの社会への還元も積極的に行なっている。例えば過去には、諏訪マタニティクリニックにおける代理懐胎事例の報道に対するコメント(2009年12月)や、自民議員有志による「生殖補助医療に関する法律骨子素案」に対するコメント(2012年11月)などを発表している。

日本の法整備

過去に何度か精子・卵子提供に関する法整備が試みられてきたが、これまで成立することなく現在に至っている。近年では自民党が、野田聖子総務会長による私案を基に、卵子提供や代理出産を容認するよう法整備を進めている。最新のニュースによれば2014年の通常国会で法案が上程される予定である。

外国での実施

現状では日本人による卵子提供を経た妊娠のほとんどが、海外で購入した卵子を用いた事例である。厚生労働省研究班(主任研究者・吉村泰典慶応大教授)の調査によると、海外での卵子購入による事例を中心に、卵子提供による出産の割合は、2012年には3年前の約3倍に増えたことが報告されている。

海外の場合、卵子の提供者は、現地の日本人留学生や業者により渡航費を支給され渡航した若い日本人女性である。しかしネパール人から購入した卵子で代理出産を行った例(マンジ事件)や、メキシコ人から購入した野田聖子衆議院議員の例など、経済格差の大きな第三国の女性から購入する場合も少なくない。

国内の卵子提供

わが国では卵子提供に関する法律は存在しないが、民間の病院団体である日本生殖補助医療標準化機関(JISART)が作成した独自規定に基づいて、一部の医療機関で行なわれている。それらの実施では一般的には家族間、親しい知人間から提供された卵が用いられてきたが、2013年には民間の卵子バンクが設立され、今後はより広範に実施される可能性が高まっている。

実施に伴う問題

他者の卵子で子を妊娠した女性や、その結果生まれた子は、健康上の問題を生じやすい可能性が指摘されている。また過去の精子提供で見られるように、生まれた子は、その事実によって精神的苦悩を被ったり、特に匿名の場合は出自がわからず大きな苦痛を抱く事が予想される。卵子の提供者は若く健康な女性であるが、彼女たちは排卵誘発剤の副作用で、後遺症に苦しんだり、自らが不妊になる場合がある。海外では17歳の少女が提供し、死亡に至った例もある。

連絡先

本映画上映に関する問い合わせ先

代理出産を問い直す会 Eggsplotation上映委員会

eggsplotationjapan@gmail.com

代理出産を問い直す会

検索